

平成25年(2013年)8月26日(月曜日)

教育

秋田県北東部にある大館市釈迦内地区の「釈迦内サンフラワープロジェクト」は、ヒマワリの栽培、収穫、搾油、瓶詰めをして製品化、「釈迦内向日葵」と名付けて販売している。釈迦内小学校(275人)の五十嵐校長が提唱し、今年で3年目だ。児童教育と地域活性化を進める取り組みに、県内外からの視察団が絶えない。

(市原幸彦)

将来の人材育成と人材の地元定着を目指そうと、平成23年度に釈迦内まちづくり協議会内に、このプロジェクト(日景賢委員長)が設立された。メンバーは、学校と地域の代表者12名で構成され、コンセプトは「すべては未来を担う子供たちのために」。事務局は同校内に設けられた。

「学校が主体になって地域に呼びかけるケースが多いのですが、一番大きい特徴は協議会の下に学校を付けたことだ」と日景委員長。「民間がいろいろコーディネートし、学校、企業、地域の役割を効果的に果たすことができる」と見る。日景さんは地元の実業家でもある。

今年の作付面積は、昨年とほぼ同じ約2.5畝だ。5月から種まきや除草、牛ふんの堆肥まき、防鳥糸の設置などをスタート。今月23日から早めの刈り取りが始まった。

10月12日からの「大館きりたんぼまつり」に間に合わせるためだ。このイベントには、3日間で10万人集まる。

釈迦内小で「ひまわりプロジェクト」

栽培、収穫、搾油し製品化

頻繁に他県から視察団

人材育成と定着を目指す

だが、会員のうち100人がほぼ毎日学校に通い、種取りの地道な作業に精を出す。子供たちと仲良くなるのがうれしくプロジェクトがいきがい、という会員もいる。

参加の輪は、地元企業にも及ぶ。趣旨に賛同した自動車販売店、郵便局、銀行など約20事務所の従業員が、仕事の合間に児童と共同作業をしたり、国道沿いの花壇にヒマワリを植えたりしている。

児童は「二戸一ひまわり運動」を促進、プロジェクトの浸透に寄与している。貝森哲也教諭は、「ヒマワリの種を学区内の全世帯に配布する。市内の銀行、郵便局などの窓口にも置かせてもらい、植えたヒマワリの種を届けてもらう」と語る。

昨年の種の収穫は2トナ。食用油573リットルを製造して、大館市内のスーパードラッグなどに出荷した。昨年産の売り上げは、7月20日現在で252万円。販売収益は学校に還元され、市助成金などを合わせて、6年生対象の長期宿泊体

プロジェクトは、昨年度「地域づくり総務大臣表彰」の賞に次ぐ団体表彰を受けた。経産省主催のキッズデザイン賞、文部科学大臣賞(市教委として)も受賞した。

大館市内には他にもキャリア教育の好事例がある。キャリア教育の先進事例として売り込み、県内外から視察団を受け入れる「教育ツーリズム」も計画。

料理や温泉もパッケージにしたモニターツアーで、案はすでに提出済みだ。「観光振興につなげたい。今年5月の沖縄県名護小からの視察団(2泊3日)には私がアテンド。皆とても喜んで



児童、PTA、婦人会員らが総動員で花の刈り取り作業＝釈迦内サンフラワープロジェクト提供

視察や他校との交流事業などに充てた。

7月末には、函館市への修学旅行に、近接する木古内町で地元の農業以外の酪農や漁業の体験学習を実施。コンブ干しやホタテの養殖、牛の乳搾りなどを行った。

日景委員長は「教育効果が全然違う」とし、農業の活性化や町づくりへの熱心な取り組みなど、地に足が付いた考え方が身に付くと見ている。

こうした中で、釈迦内地区には県内外からの視察団がひっきりなしだ。県内のみならず、島根県、沖縄県の小学校では、今年度から釈迦内から譲り受けたヒマワリの種で栽培を始めた。

「今までは面積や人数の拡大より、人の意識を拡大することが大切だ。今の小学生が大人になったときに、同じプロジェクトがずっと続いていて、大人としてサポートできるような形になってくれれば」と語っている。